

News Letter



赤く染まったアッケシソウが一面に広がる風景は、北海道の能取湖やサロマ湖などでは秋の風物詩となっています。

アッケシソウは塩湿地に生育するアカザ科の一年草で、高さ10～35cmに生長し、秋になると緑色から赤色に変わります。花は小さく、葉の腋に3つずつ集まって咲きます。多肉質の茎は多く枝分かれし、茎を取り囲む葉は小さく膜質で一見すると葉が無いように見えます。こんな形と色がサンゴを思わせることからサンゴ草とも呼ばれているそうです。

このような変わった形態は、塩湿地という環境で生きていくための工夫なのです。本来、植物は塩分に弱いものです。白菜の漬け物を思い浮かべてみてください。塩をふられた白菜からは水が出てきます。浸透圧の関係で、植物は体内の水分を奪われるため、乾燥にさらされると似た状態になります。アッケシソウの小さな葉は葉からの蒸散を抑え、多肉質の茎は水分を蓄えるために役立っています。



アッケシソウの名前は北海道の厚岸湾で発見されたことにちなんでつけられました。ただ残念ながら、現在は地盤沈下のためほとんど見かけなくなったとか。

アッケシソウは日本では北海道の他にも四国に分布していますが、これは人に運ばれたものと考えられています。江戸時代から明治にかけて瀬戸内地方の塩が北海道に船で輸送されていました。北海道からは海産物などのほか、バランスをとるために砂袋が積み込まれました。このアッケシソウの種が紛れ込んだ砂が、塩田で捨てられ、種子が発芽、生育したというのです。気候が暖かいため、北海道のものに比べると全体に大きく、越年性になるなど違いが見られるそうです。



一度はあこがれの赤いアッケシソウを見に、北海道東部の群生地を訪れたいと思いつつ、瀬戸内地方でけなげに生きている様子に思いをはせるのも楽しい秋深まる今日この頃です。

(北海道支社自然環境調査室・伊藤美穂子)

秋の風物詩

赤く色づくアッケシソウ

目次

エッセイ	秋の風物詩 赤く色づくアッケシソウ	1
研究紹介	真っ黒なハチのハンターに魅せられて	2
マンガ	ヒヌマイトトンボ調査物語	4

Information REPORT	自然環境の定量化技術	5
	ある日のフィールドノートから はじめが肝心	8